

# 忍術指南

野村胡堂

一

「八、身体が暇ひまかい」

銭形平次は、フラリと来たガラツ八の八五郎をつかまえました。

「有難いことに、あつしが乗出すような気の利いた事件ことは一つもねえ」

「大きな事を言やがる」

二人は相変らずの調子で話を始めました。

「いったい何をやらかしゃ宜いんで、親分」

「左内坂に忍術指南の看板を出した浪人者があるというじゃないか」

「聴きましたよ、なるせ成瀬九十郎とか言つて」

「その道場へ、これから入門しようと言うのだ」

「へエー、親分がね、へエー、忍術の稽古けいこに」

ガラツ八は滅法キナ臭い顔をして見せます。

「忍術も武芸のうちだというから、教えて悪いことではあるまい

が、泰平の世の中に『忍術指南』の看板を出すのは何となくおだや穩か

じゃねエ。それに忍術というものは、こうが甲賀組とかいが伊賀組とかが公

儀から預って、町人や百姓には稽古をさせるものじゃねえと思つてゐるが、——左内坂のは甲賀流でも伊賀流でもなくて、霞流かすみりゆうとか言うんだってね」

「へエー」

「御奉行所でもひどく心配なすって、万一謀反むほんの企てくわだでもあつては一大事だから、中へ入つて捜さぐるようにと申付けだ」

「へエ——」

「これから市ガ谷左内坂まで行つて、成瀬九十郎の門人になろうと言ふのだよ、お前も付き合つて見ちゃどうだ」

「そいつを稽古しておいたら、晦日みそかに借金取が来たときなんか、

恐ろしく調法だろうね、親分」

「馬鹿な事を言やがれ」

無駄を言いながら二人は市ガ谷左内坂に向いました。

ある秋の日の夕景、山の手の街は、もう赤蜻蛉あかとんぼがスイスイと頭の上を飛ぶ時分のことです。

成瀬九十郎の道場は——いや、道場と名のつくようなものではありませんが、表に出した真新しい看板の『霞流忍術指南』の六文字だけが目立つ程度の、至って貧弱なしもたやでした。

「御免」

声のでっかいガラッ八が、精いっぱいいぎの威儀いぎを作おとって訪おとなうと、

町内中の新漬しんづけの味にひびくようなダミ声で、ドーレと来るべき筈の段取を、どう間違えたか、

「ハイ」

優しい声がして、格子と中の障子を、たしなみ深く開けたのは、十八九の淋しい娘です。

神田の次平、五郎八と名乗って、忍術執心しゅうしんのことを申入れると、  
「しばらくお待ちを」

娘は一たん奥へ引込みましたが、やがて改めて二人を案内します。

「神田の次平、五郎八と言うのか。本来ならば町人に忍術は無用

のものだが、まだ一人も弟子がつかないから、大負けに門弟にしてやる。さア、ズーツと此方へ通るが宜い」

おそろしく口の達者な四十男が、畳を剥いで、床板だけ敷き直した十畳敷ほどの道場に二人を通しました。

娘の淋しく美しいに似ず、これはまた何んと言う馬鹿馬鹿しい忍術の先生でしょう。背は低い方、肉附も極度に節約して骨と皮ばかり、顔は皺だらけのくせに、眼と口だけが人並以上で、わけでも爛々たる眼には、人を茶にしたような、虚無的な光さえ宿っているのです。

「有難うござります、何分よろしくお願い申します」

平次は用意の束脩そくしゆうを二人分、お盆を借りて差出し、その日は四よ方もやま八方の話だけで帰りました。戸口を出るともう、

「親分、変な野郎じゃありませんか」

ガラツ八の八五郎には、腑ぶに落ちない事だらけです。

「何が変なんだ」

「天下を一と呑みにするような大きな事ばかり言やがる癖くせに、人間を見ると、沢庵たくわんになり損ねた干大根ほしだいこん見たいな野郎で——」

「だが、一と癖ありそうだな。俺は馬鹿にして行つたが、逢つて見て考え直したよ」

「へエ——、そんなもんですかね、——尤もつともあの娘は満更じゃね

えが」

「娘の鑑定めきぎだけは、大した腕前だな、八」

「それ程でもねえ」

稽古けいこ日は三の日と、八の日。教えることは他愛たあいもありませんが、

この成瀬九十郎という人物から、平次は不思議な力と情熱を感じて居りました。

三度目の稽古日、忍術に関するいろいろの口伝くでんや理論を聞いて、小さい課程の幾つかを済ませた後、別室に退いて、娘に茶を入れさせながらの話です。

「少し話して行くが宜い。次平は生れながらの忍術使いだ、二三



年みっちりやると、うまくなるぞ」

成瀬九十郎はそんな事を言つて、大満悦です。

「あ、あ、先生？」

ガラツ八は側から鼻を出しました。

「五郎八は駄目だ」

「へエ——？」

「生れながらの鈍根どんこんだな、お前は」

「へエー」

まるつきり型無しです。

「ところで先生」

平次は静かに切出しました。

「何じゃな、次平」

「近ごろ御府内を騒がしている山脇玄内やまわきげんないとか言う泥棒、あれはやはり忍術の心得があるのでしょいうな」

「心得どころではない、忍術名誉の達人だな。南北両奉行の役人が、齒ぎしりしたところで、山脇玄内を縛ることなどは思いもよらない」

「それほど心得のある者が、押込夜盗の真似をするとは憎いじゃございませんか」

「いや、これにも仔細しさいのあることだろう。例えば、山脇玄内は義

賊と言つた輩ともがらかも知れぬではないか」

成瀬九十郎はケロリとしてこんな事を言うのです。

「その義賊というのを、あつしは大嫌いなんで。貧の盗みは百文盗つても世間は許しやしません、義賊と名が付くと、百両盗つて十両か二十両だけ貧乏人にやり、あとは自分の贅沢に費つても、世間じゃ見上げたもののように言い囃はやします。あつしはそれが気に入らないんで」

「たいそうな意気込だな、次平」

成瀬九十郎は強しいても争あらそわず、ただニヤリニヤリと笑っているだけです。

二

山脇玄内の跳梁ちようりょうはそれからまた一段と目ざましくなりました。襲われるのは大抵高家大名、でなければ大町人で、盗られる金も百両、二百両と纏まとまった口ばかり。それを貧乏人にバラ撒まくのが山脇玄内の道楽らしく、玄内の活躍が激しくなればなるほど、心なき江戸っ子は喝采かっさいを送るのです。

中には、不義の富を積んでいる者を襲って、有金を奪い取り、それを正統せいとうの持主に還かへして溜飲りゆういんを下くだげたりすることもありまし

た。が、どんな弁解があるにしても、山脇玄内が泥棒を働いてい  
ることには何の変りもありません。

それから二三日経ったある晩、山脇玄内の増長は羽目を外して、  
市ガ谷の尾州家上屋敷に忍び込み、その金蔵に潜り込んで、千両  
箱を二つまで盗み出したのです。

六十一万石の大々名、御三家随一の名家でも、これは捨て置く  
わけに行きません。当面の責任者御蔵番奥宮鏡太郎は、用人玉垣  
三郎兵衛ともなに伴われて神田の平次を訪ねて来ました。

「昨夜酉刻むつから戌刻いっつまでのあいだ、御門の締まる前後、詳しく言  
えば御蔵の戸前に錠じょうをおろす前後の、ほんの一寸ちよつとした隙すきにやられ

た。——盗られた金は二千両だが、これが出て来なければ、役向やくむき不取締で、この奥宮鏡太郎腹でも切らずばなるまい。拙者が腹を切れば、下役二人も生きてはいまい、その女房子供も路頭に迷うことであろう。言わば人間の命幾つにも及ぶ事件、何とかなるまいかの、平次殿」

奥宮鏡太郎、畳の上に手を突き、分別盛ざかりの額ひたいを埋めての懇願こんがんです。

「お大名方御屋敷に起ったことは、町方の者ではどうにもなりません、自由にお屋敷の中へ入れて下されば、何んとか工夫をして見ましよう」

平次もツイ相手の真剣さに引入れられます。

「それは易いことじゃ、お屋敷へ自由に出入りのことは拙者が引受けよう」

そう言ってくれるのは、用人玉垣三郎兵衛、これでどうやらこ  
うやら段取りだけは出来ました。

「それではお供いたします」

市ガ谷の尾州邸へ出かけて行った平次は、奥宮鏡太郎の案内で、  
内外隈なく見廻りましたが、捕物の名人と謳われた銭形平次の慧  
眼でも、何の証拠も掴むことは出来なかつたのです。

扉も高く見張りも嚴重で、容易のことでは外から忍べそうもあ

りませんが、屋敷の中には、まさか二千両の大金を持出すような不心得者がある筈はなく、それに金蔵の扉も土台も無事で、引つ掻きほどの傷もついていないところなど、近頃御府内を騒がしている、山脇玄内の手口でなければなりません。

「暫らく考えさせて下さい」

さすがの平次も、それでも言つて引下がる外は無かつたのです。相手が山脇玄内だとすると、これは容易ならぬ事になります。物を考えるともなく、平次の足癖は、そこからあまり遠くない、左内坂の成瀬九十郎のところを訪ねました。

「これは、次平ではないか、今日は稽古日ではないようだが」



成瀬九十郎は少し腑ふに落ち兼ねた顔です。

「この辺ついでを通った序と申しちゃ失礼ですが、ちよつとお邪魔をいたしました」

「邪魔どころか、退屈で困っている。ゆるゆると話して行くが宜い、——ところで大層顔色がよくないようだが、何か心配事でもあるのかな」

「心配事なんかございません、——尾張様のお屋敷へ泥棒が入った相そうで、世の中には恐ろしい奴があるものだど、感心をしていたところでございます」

「別に感心するほどの事ではないではないか」

成瀬九十郎は自若<sup>じじやく</sup>としておりますが、充分に好奇心を動かしている様子です。

「あれほどのお屋敷には嚴重な見張り見廻りもあります。表裏の門は門鑑<sup>もんかん</sup>がなければ、一寸も通すことではありません」

「待て待て次平、——お前は成瀬九十郎の弟子になって、忍術の手ほどき位は習ったはずだ。見張りがあるうと、門番があるうと、そこを通るのは何でもない位のことは知って居るだろう」

「それは理窟で、——尾張様のお屋敷へ入るのは、そんな呑気なものじゃございません」

「忍術は知らぬ他国の敵の陣中へも忍び込む術を教えるのだ。泰<sup>たい</sup>

平へいの御代の大名屋敷へ入るなどは物の数でもない」

「でも」

「お前は見張りがあると言ったが、見張りはあつたところで、見張り同士ではとがめもしないだろう。門鑑もんかんというものがあると、言つたが、それは士分以下の者や、出入りの商人には入要でも、殿様が自分で通るのには門鑑は要るまい。他の大名方のお使者や、家中お歴々とても同じことだ」

「そう言えばそうですが、易々やすやすと御金蔵へ入るのは、係り役人の外には出来ない筈じゃございませんか」

平次も釣られるともなく言い募つりました。

「その係り役人ならば、たれうたが誰疑うものもなく、自由に金蔵へ出入りが出来るだろう」

「――」

「すべて、物事に無理をしないのが忍術の極意だ。山脇玄内とか言う奴、何の巧みたくもなく、ぬくぬくと千両箱を二つまで盗み出したことであろう。相手は六十一万石の大々名だ、面白いではないか、次平」

成瀬九十郎はこんな事を言つて、カラカラと笑うのです。

「少しも面白くはございません。相手は六十一万石の大名でも、その日暮しの貧乏人でも、物を盗んで良いという理窟りくつはございま

せん」

「大層やかましい事を言うな、——だがな次平、その二千両を其日のものにも困っている、気の毒な貧乏人にわけてやるとしたら、山脇玄内の罪も半分は軽くなるというものではないか」

「そいつを、あつしは大嫌いで。高利貸をして信心事に金を費うのも、泥棒を働いて施ほどこしをするのも、卑怯ひきような心持に変わりはありません。そいつは皆んな、悪事を働いて極楽へ行きたいと言った、虫のいい人間のすることですよ」

「だが、山脇玄内はそんな気じゃあるまい。人の出来ないような事をして、溜飲りゆういんを下さげているのだらう。綱渡りをしてヤンヤと言

われるように、——山脇玄内にして見れば、泥棒もまた一つの芸事ではないかな」

「泥棒が、芸事？ 飛んでもない事ですよ、先生」

平次は以ての外に気色ばみます。

「それが悪いのかな、次平」

「尾州の蔵番奥宮鏡太郎とその配下の二人の役人が腹を切りかけていますよ」

「——」

「二千両の金が戻らなきや三人の命を助けようはありません。三人の武家が腹を切れればその親も子も配偶つれあいも、路頭に迷うことは判

り切っております。これが増長慢心した泥棒風情の芸事のせいで済むでしようか」

「——」

「貧<sup>ひん</sup>の盗みや出来心の盗みならともかく、これじゃ山脇玄内、盗った二千両に十倍の利子をつけて施<sup>ほどこ</sup>しをしても、勘弁出来ないじゃありませんか」

「なるほどな、——お前の言うのも尤もだ。その二千両が還<sup>かえ</sup>りさえすりゃ、三人の者は腹を切らなくて済むだろう」

成瀬九十郎は妙な事を言い出しました。

「それはもう、二千両の金さえ無事に還れば、役人方が腹を切る

「までもありません」

「それならワケはないじゃないか」

「へエ——」

平次は少しつままれそうでした。

「よく聴くがよい、次平」

「——」

「俺は居ながらにしてその二千両を捜し出してやろう——山脇

玄内いえと雖ども鬼神ではあるまい、物の隙間すきまや、節穴から入れるわ

けはないのだ、——多分、酉刻むつ前後の門の閉まる前、出入りの一

番混雑する時を狙ねらって、家中の身分ある者と見せかけ、表門から



威張り返って入ったことだろう」

「――」

「金蔵の入口は、たそがれ時、係り役人の後ろに物の影のようについて入ったに違いない。役人の後ろにヒタと附いて、向うの方、蔵の中から物音を聞かせるのだ。役人はその物音に心ひかれて、あ、た、ふ、た、と入ったに違いない」

「――」

「山脇玄内は多分一と晩金蔵の中に泊って、幾万両とも知れぬ小判と一夜を明かした事だろう。翌る朝、係り役人が入って来て、千両箱二つ紛失したのに仰天しているとき、山脇玄内は誰はばか

らず金蔵を立出<sup>い</sup>で、大手を振って表門から出たのだ」

「千両箱は？」

平次は釣られるように膝をすすめました。

「山脇玄内でも、二つの千両箱を<sup>りようわき</sup>両脇に抱えて、朝の表門をノコノコと出られる道理はない」

「――」

あまりの明察に、平次はあっけに取られて、この貧弱な忍術使いを見やるばかりです。

「後日折を見て取出すつもりで、屋敷の中に隠してあるよ。少し八卦<sup>け</sup>を置いて見ようか、――左様<sup>さよう</sup>、――まず御金蔵のすぐ傍だ、

土に縁があつて、石に縁があつて、水に縁があるかな。——お前は  
大急ぎで取つて返し、三人の小役人を安心させるが宜い。腹を  
切ると痛いぞとな」

「先生」

平次はさすがに仰天しましたが、いま尾張屋敷から出て来たこ  
とまで言い当てられたのです。しかし最早もはやぐずぐずして居る時で  
はありません。挨拶もそこそこ、一気に屋敷へ取つて返しました。  
今にも降り出しそうな村雨むらさめ模様の空合です。

「二千両の行方が判りましたゆくえ」

奥宮鏡太郎のお長屋へ通されると、銭形平次はいきなりこんな事を言うのです。

「何、二千両の行方？ 何処だ」

「お屋敷から持出された様子はございません。もういちど御金蔵のあたりをお調べ下さい」

「左様か」

奥宮鏡太郎、これも謹慎中の下役二人をつれて、あたふたと金蔵に駈付けました。バラバラと一と村雨が来ましたが、もうそん

な事などは考えても居ません。

「何処だ、平次」

「土に縁があつて、石に縁があつて、水に縁のあるところでございます」

「それだけでは解るまい」

「いえ、これで確かに判る筈でございます」

平次は不安がる役人を促して、うなが金蔵の四方をグルリと廻りました。土に縁があり、石に縁があるというところ、土台石の下などは最も恰好ですが、それでは水に縁がありません。

金蔵の南の方に用水井戸ようすいがありますが、井桁いげたが栗材で、これは

石に縁が無く、雨樋あまどいは水に縁があつても、銅あかですから金かねに縁しようを生じます。

「何処だ、平次」

せき立てられて、平次はしばらく途方に暮れましたが、雨脚は次第に繁くなって、平次も三人の役人もぐっしより濡れてしまいました。

「あッ、これだッ」

銅あかの雨樋あまどいから落ちた水が、御影みかげで置んだ見事な暗渠あんきよの中にチヨ

ロチヨロと落ちて行くのを見て、平次は思わず歓声を挙げたのです。濡れるのも構わず、泥の中に膝を突いて、暗渠に手を入れる

と、指先に触れたのは、固い箱が二つ、引出して見ると、紛れもないそれは千両箱です。

「――」  
物をも言わずに飛付いた奥宮鏡太郎、千両箱を抱えるようにしたまま、用人の玉垣三郎兵衛を呼んで、四人立ち会の上蓋を払いました。

「あッ」  
中は燦たる小判、何の紛れまぎもありません。

「有難い、平次殿。心ばかりの御礼も致し度たい、先ず拙者せつしゃ長屋へ

二つの千両箱を金蔵に納めると、奥宮鏡太郎は平次を誘さそいます。

「飛んでもない奥宮様、あれはあつしの働きじゃございません。あつしに教えてくれた人があるのです、——外ほかにも急ぎの用事があります。御免下さい」

平次は相手の引止めそうな様子を見ると、返事も聴かずにサツと引揚げました。

行く先は左内坂の成瀬九十郎の道場。

成瀬九十郎に逢って、どんな態度に出たものか、平次も全く思案が定まりません。思い切って縛ったものだろうか、相手の出ようを見たものだろうか、兇賊山脇玄内というのは、成瀬九十郎の



変名に相違ないと睨みましたが、さすがの平次も、この忍術の師匠を縛るだけの証拠は一つも手に入らなかつたのです。

「御免」

思い切つて飛込むと、中は空っぽ。突き当りの障子一パイに、書きも書いたり、淋漓りんりとした大文字が数行。

盗んだ金を身に着けるなら、成瀬九十郎こんな貧乏はせぬ、盗賊を芸事と思う思わぬは其方の勝手だが、構かまえて師弟の道を踏み違ちがえまいぞ、穴賢あなかしこ。

山脇玄内こと

成瀬九十郎

門弟次平こと 錢形平次殿へ

「ウーム」

平次は思わず唸うなりました。あまりにも鮮あざやかな背負い投げです。

四

それから五六日は何事もなく過ぎました。

「親分、あの娘はちよいと踏ふめたね」

ガラッ八は思い出したように変なことを言います。

「どこの娘だ」

「へッ、通じないような顔をすることはないでしょう、——左内坂のそれ」

「大泥棒の娘だよ、あれは」

「親が泥棒だって、娘は大丈夫で」

「馬鹿だなア」

「あの加奈かなとか言った娘に、もういちど逢いたいような気がしますよ。ちよいと淋しいが良い娘でしたね、夕顔の花のようで」

「夕顔の花と来たね」

「物の譬たとえですよ、親分」

「それほど執心しゅしんなら、あの娘を捜さがしてくれ。娘を捜し出せば、親の隠れ家も解るといふものだろう」

「やってみましょうか」

「江戸は広いぜ、八」

そんな馬鹿なことを言っている時でした。

「あの、お客様ですが」

平次の女房のお静が、かただすき片襷を外したまま、覗き加減に声をかけました。

「何処の方だい」

「名前は仰っしゃいません、若い、御武家風のお嬢さんで」

「丁寧に通すんだ」

平次はガラッ八と顔を見合せました。間もなくお静に案内されて来たのは、成瀬九十郎の娘お加奈かな——ガラッ八が夕顔の花に譬たとえた淋しい娘です。

「あッ、お前さんか」

素すッ頓とん狂きやうな声を出したのはガラッ八でした。

「親分、お願いがあつて参りました」

お加奈は部屋の隅の方に、慎つつましく手をつくのです。

「何うしてこの平次のところへ来る気になりました」

「父から教わりました」

「？」

「父は常々、江戸中で怖いのは、銭形平次たった一人と申して居りました」

「――」

平次は少し擦ぐったく首を縮めました。

「その父を親分は疑っているに違いございませんが、父は正直一途の浪人者で、山脇玄内などと言う泥棒ではございません」

お加奈はピタリと言いついて顔を挙げるのです。

「その証拠は、お嬢さん」

「第一に、山脇玄内が尾州様、御金蔵に泊って二千両盗ったとい



聖人の言葉を、平次は小耳に挟んでいたのです。

「どうしたら宜いでしょう、親分」

お加奈は詮方せんかたもない姿でした。

「本当の山脇玄内を捜し出して突き出すことですよ、外に工夫はありません」

「――」

お加奈かなは悲しそうでした。が、それ以上何にも言うことが無かったらしく、平次が突っ込んだ問いまで外らして、そこそこに帰ってしまいました。

その後ろ姿を見送って、ソツと八五郎に眼くばせすると、ガ



ラツ八は少しあわて気味に、お加奈の後を追って、夕暮近い街に飛出します。



©2017 萩 柚月

それから一刻ばかり。

「ひどい目に逢わされたぜ、親分」

ガラツ八は忿々ぶんぶんとして帰って来ました。

「娘へちよつかいを出して、往来へ抛ほうり出されたんじやあるまいな」

「冗談じゃありませんよ、後をつける度毎たびごとにやられた日にや、十手捕縄の手前も面目ねえ」

「それじゃ何うしたんだ」

「あの娘は後ろも見ずに歩くから、安心して跟つけて行くと、いきなり神楽坂裏のしもたやへ入るじやありませんか。占しめたと思っ

て、しばらく経ってから入って見ると――」

「空家あきやだろう」

「その通りで、正に一言もねエ」

ガラツ八は額を掌てのひらで叩くのです。

「その家に、貸家札が貼ってあったのか」

「飛んでもない、貸家札なんかありや、あんな娘っ子の籠かご抜けを逃しやしません」

「近所で訊いたかい」

「訊きましたよ。すると、近頃まで貸家だったが、塞ふさがったかも知れません。でも挨拶もないしお蕎麦そばも来ないから、まだ引越し

て来たわけじゃないでしょう——という話で」

「それじゃ用意した細工だ、何だつて突っ込んで訊いて見なかつたんだ」

「へエ——」

「へエ——じゃないよ。籠抜けだつて、唯ただの空家へいきなり飛込めるものじゃねえ。その家の差配さはいに訊いて、どんな人間が借りたか、いつ引つ越して来るか、よく確かたしかめて、突っ込たしかむなり、張り込むなり、せめて三日も頑張つて見るが宜い。手前てまえの好きな夕顔の娘が、きつともういちど姿を現わすに違ちがえねえ」

平次の推理すいりは整然せいぜんとしております。

「なるほどね、——だがね親分。夕顔の娘は、夕顔の花の間違  
じやありませんか」

「馬鹿野郎、夕顔で気に入らなきや、冬瓜とうがんなり糸瓜へちまなり、勝手な  
ように融通して置きやがれ」

ガラツ八はまことに散々ですが、最後に一番取つて置きくわだの反抗  
を企てました。

「それじゃ親分、下つ引を五六人狩り出して、山脇玄内を手捕り  
にしても構やしませんか」

「宜いとも、安心して手柄にするが宜い」

「今度は、きつとうまくやりますぜ、親分」

「念の入った御挨拶だ、——俺だつて遊んじやいないよ八」  
二人はそんな事を言つて別れました。この上もなく仲の良い親分子分が、手柄を張り合うようになったのは、本当に珍しいことです。

## 五

その晩、山脇玄内は、神楽坂の質屋しちや、天城屋六兵衛あまぎやの家を襲いました。盗った金は千両箱が一つ、万事うまく行つて、イザ逃げ出そうと言ふとき、目ざとい主人六兵衛に騒ぎ出され、多勢の雇

人が、かなだら金盃を叩いて急を告げたので、こんな時のために用意された町内の若者が数十名、天城屋の内外を始め、神楽坂の上下、蟻ありの這出る隙間すきまもなく固めてかたしまいました。

泥棒は、どこへ行つたか、しばらくは影も形も現わしませんでしたが、包圍網を引締めて、最後に猫の子一匹隠れていないと判つた時、ツイ先刻さつき、町内の若い者の一人のような顔をして、大手を振つて出て行つた者があることに気が付きました。

「あッ、あの野郎だ、——あれが泥棒だつたんだ。天城屋の提灯ちようちんを持って、自分の顔をわざわざ見せるようにして行つたぜ」

「妙にニヤニヤした野郎だが、誰だかちよつと思ひ出せない顔だ



と思つたよ」

そんな事を言つたところで、もう追いつくわけはありません。泥棒の逃げたのはそれでわかりましたが、盗られた千両箱は、泥棒が素手で逃げたにも拘らず、家の中にも、路地の外にも、何処にも見えなかつたのです。

夜中から朝にかけて、おおそうじ大掃除ほどの騒ぎでした。天井裏も床下も、押入納戸、落しの中は言うまでもなく、井戸の中までも見ましたが、千両箱に似寄りのものもありません。

その翌る日の夕刻、フラリとやって来たのは銭形平次でした。

「あ、銭形の親分」

顔を知ってるのが声をかけると、千両箱を捜しあぐねた人たちは、地獄で仏と言った安堵あんどの顔になります。

「山脇玄内に千両箱をやられたそうだね」

「それですよ、親分、——持って出た様子はないのに、盗られた千両箱は、どこを捜しても見付からないのです」

天城屋六兵衛は萎しおれ切っておりまして。

「俺にも判らないかも知れないが、ちよつと見せて貰いましょうかな」

平次は家の中を一通り見廻して、それから外へ出ました、わけても水瓶みずがめと下水と井戸に気をつけたのは、少しばかり訳のある

ことだったのです。

今日——未刻半頃やつはん、平次のところへ、手紙を一本抛り込んだ者があつたのでした、披ひらいて見ると、

天城屋の千両は、水に縁があり、火に縁があり、空に縁がある

玄内

こう書いてあるのです。

平次はともかくも神楽坂まで飛んで来ました。別に自信があるわけではありませんが、この手紙の謎の文句から、何かしら金の隠し場所が判るような気がしたのです。

水に縁のある場所は一通り調べましたが、火に縁があると言

うと、銅壺どうこか鉄瓶てつびんの外はありません、その上、空に縁があると言  
うと、全く想像を絶してしまいます。

「あ、解った」

平次は不意に声をあげました。

「何処で？ 親分」

「路地の足跡あしあとが深過ぎたし、庇ひさしの瓦かわらが一枚こわ壊れている、——梯子はしご  
を」

平次の声に応じて、裏から梯子を持って来ました。それを踏ん  
で大屋根の上に登った平次、天水桶てんすいおけを覗いて思わず歓声をあげた  
のです。

「あつた」

水に縁があつて、火事のために用意して、常に大空を映す天水桶は、なるほど謎の言葉にピタリとするのでした。山脇玄内の手口を知っている平次は、思いも寄らぬ隠し場所を考えながら、少しの手がかりから、天水桶に眼をつけたのは手柄てがらです。

「山脇玄内は大物はきつと二度に盗む。今晚を過したら、この千両も手に戻らないところだったかも知れない」

平次がそう言うのは無理のないことでした。

「まずまず」

とお祝の用意をするのを、平次は振りもぎって帰って来ました。

こんな事で人に褒められたくはなかつたのです。——泥棒の山脇玄内から、謎の手紙を受取つたと言つたところで、誰がいつたい本当にするものでしょう。

その翌る日ガラツ八は、鼻高々と平次の家へやって来ました。  
「親分、解りましたよ」

「何が？」

「何が——は情けないな。成瀬九十郎、又の名山脇玄内やまわきげんないと、その娘お加奈の住んでいる家ですよ」

「何処だ」

「あの空家のツイ裏」

「そんな事だろうと思つたよ」

「相変らず貧乏臭く暮しているから、あれが大泥棒とは、誰だつて気が付くめえ」

「それを気が付いたんだから、八五郎は大したものさ」

「からかつちやいけません、——今晚手入れをして、一ぺんに縛ろうと思うがどんなものでしょう」

八五郎はもう、山脇玄内を生簀いけすの魚のように考えている様子です。

「それもよかろうが、止した方が賢かしこいかも知れないぜ、八」

「なぜ、親分？」

八五郎の手柄などを嫉ねたみそうもない平次が、この手入れにはつきり反対するのは不思議なことでした。

「だって、こう言つて来てるぜ、——こいつはいつもの手紙と筆蹟ては違つてゐるが、言うことは抜き差しのならねえ話だ。〓今夜山脇玄内は海真寺本堂を襲おそい、本尊弘法大師自刻じこくの坐像を盗み出す筈。これは玄内は大師の帰依者きえしやだが、海真寺の住職は戒律かいりつを保たず、墮落だらく僭上せんじょうの沙汰があるので、尊い本尊を預けて置けないからだ〓と書いてある」

「へエ——、あれが大師の帰依者で？」

「とにかく、俺は海真寺へ行かなきゃなるまい。どうだ、一緒に



行つて見る気はないか、八」

「そいつは無理ですよ、親分」

「何が無理なんだ」

「今夜と言う今夜、八方から網を絞しほつて、山脇玄内を隠れ家から挙げることになって居るじゃありませんか」

「じゃ、勝手にするがよかろう」

「へエ——」

「その代り、山脇玄内を縛しほつたら、牛込見附の番所へ来い」

「へエ——」

## 六

平次が海真寺へ行つたのは、もう酉刻過ぎむつでした。

門前の花屋を覗いて、寺内を一と廻り、庫裡くりから本堂へ入つて行くと、

「あ、銭形の親分さん、御苦労様で」

檀家だんか総代、世話人、寺男の一隊が、住職から小僧を交まじえて、グルリと本尊の大師像を取囲み、怖々おぞおぞながら次第に深くなる夜を迎えているのでした。山脇玄内警告の一条は陽のあるうちに平次から寺へ通じて置いたのです。

本尊は等身大の坐像、黒々と時代の附いたのに、金欄きんらんの袈裟けさを掛  
け、座布団の上に据えて、大厨子おおずしの中に納め、その前面は諸人  
の無遠慮な視線を避さけるために、錦にしきの几帳きちようで隠してあつたのです。

「ちよつと拝まして貰いましょうか」

ズカズカと本尊の前へ行く平次。

「あ、それはなりません。当寺の本尊は秘仏ひぶつになって、年に一度  
しか開帳しないことになっております」

住職はあわてて止めました。

「そんな事を言つたつて、盗まれた日にや何にもなりませんよ」

「だが――」

住職の渋るしぶのも構わず、平次は、

「遠くからちよいと拝むだけですよ、——あつしはここに居るか  
ら、小僧さん、その几帳きちょうをほんの少し開けて見せて下さい」

「——」

小坊主は住職の顔を眺めながら、強たつて反対の様子のないのを見定めて、厨子の几帳を半分ほど開きました。

「もう沢山、——なるほど結構な大師様らしい。泥棒調伏ちようふくのため  
に、うんと線香をあげて下さい、——線香よりは、抹香まつこうの方が宜  
いかも知れない」

平次はそんな事を言い捨てて、庫裡くりの方へ行きましたが、やが

て一と掴つかみの赤唐辛子あかとうがらしを貫つつて来て、それをよく揉もんで、盛んに燃もえている香炉こうろの中へパぱッと抛ほうりました。

「あッ、これはたまらぬ」

驚おどいたのはその座まにいる十幾人まの人たちでした。抹香まっこうと唐辛子とうがらしに燻くすべられて、咳せき込みながら逃げ出すと、それよりも驚おどいたのは、本尊ほんぞんの弘法大師こうぼうだいし様坐像ざざうでした。——いや弘法大師こうぼうだいしの坐像ざざうになりすましていた泥棒どろぼうと言いった方が宜よろいでしょう。続けつげ様に咳せき込みながら、

「何なにと言う事ことをするのだ」

厨子ちゆうしから飛出とすと、戒壇かいだんと木魚もくぎよを踏ふんで、パぱッと外そとへ——。

「待て待て、山脇玄内」

続く銭形平次、ツ、ツツと前へ駆け抜けて、パツと両手を開いたなりに突っ立ちます。

「邪魔だツ」

「御用だぞツ」

「何をツ」

二人はパツと合つて、もういちど左右に飛退きました。大師像に化けた曲者の手にはあいくちヒ首が、平次の手には十手がひら閃めきます。

二度、三度、十手とヒ首が鳴りました。平次にぬかりは無かつたにしても、この曲者は思いの外ほかの腕前です。

「灯だ」  
あかり

平次は十手を左に持ち替えながら怒鳴りました。相手は稀代の忍術使いです。平次も一と通りの稽古をしたお蔭で、その術の発展だけは、巧みに妨げましたが、何分薄暗い寺の庭で、いつ、どこへ姿を隠されるか解りません。

灯の来る前、曲者はもういちど平次に飛付きました。辛くも左手の十手を働かせて、その襲撃を退けた平次、右手が高々と拳がると、得意の投げ銭が、闇を剪って飛びます。

一つ、二つは避けましたが、三つ目に頬を打たれ、四つ目に唇を打たれ、五つ目に右手の指を打たれて、思わずヒ首を取落した

ところへ、

「御用だッ」

平次の体当り見事に極って、曲者は石畳の上に撞どと倒れました。

「それッ」

おりかさな

と折重おりかさなった弥次馬、一瞬の後銭形平次は、兇賊山脇玄内を、雁がん

字じがらめにして、埃ほこりを払はっておりました。ちょうどその時、庭一

パイに持出された灯で見ると、山脇玄内の顔は、小柄しわで皺しわだらけ

で、眼と口が大きくて、干大根ほしだいこんのようで、——成瀬九十郎そつく

りです。

が、曲者は口を緘つぐんで物を言わず、平次もまたそれを聴こうと



もしません。

「本尊様はどこだ」

「どこへ持出した」

住職と檀家だんか総代は、今さらながら空っぽのお厨子ずしに気がつきませんでした。

「御本尊は寺内にあるに違いありません。それはこの曲者の手口です」

「寺内？ どこでしょう、親分」

「おいおい判るでしょう」

「どうしてお厨子の中なんかへ曲者は入っていたのでしょうか、親

分

いろいろの質問は八方から飛びます。

「薄明るうちに御本尊を持出して、寺内に隠し、しばらく人目を誤魔化ごまかすために、自分で本尊になり済ごましたのでしょう」

「どこに持出したのでしょう」

「捜して下さい」

それから半刻ばかり、寺の内外をのこる隈なく捜したがわかりません。曲者はそれを冷やかに見て、一句も言わず、折があらば逃げ出そうとしている様子、平次は少しも目が離せなかったのです。

「とにかく、寺内にあるに違いない。気長に捜したら出て来るだろう」

平次は諦<sup>あき</sup>らめて寺を立出でました。縄付を追って、門前まで来ると、花屋には灯が点いて、店番の老爺が、襦<sup>どてら</sup>袍を着て頬<sup>ほお</sup>冠<sup>かむ</sup>りをしたまま、つくねんと坐っているのですが、その恰好が一刻<sup>とき</sup>ばかり前に、平次がやって来たときと寸毫<sup>すんごう</sup>の変りもありません。生きた人間が、そんなに長いあいだ、寸毫も形を崩<sup>くず</sup>さずに、生温<sup>なまあたた</sup>かい秋の夜を、襦<sup>どてら</sup>袍を着て居られるものでしょうか。

「あの老爺だ」

平次が指すと、二三人の人が飛付くといっしょでした。頬<sup>ほお</sup>冠<sup>かむり</sup>を

取り、襦袍を剥ぐと、中から現われたのは、鑿のみの香も尊く、慈眼じがんを垂れた大師の尊像ではありませんか。

「老爺をどこへやった」

続く不安はそれでした。

「物置の中で本当に眠っているよ」

くせもの曲者は始めて口を開きました。

「それから、もう一つ、その御本尊の胎内たいないを見て下さい」

平次はたったそれだけの事を言って、曲者を追っ立てて牛込見附へ急ぎました。曲者が等身大の木像に執着しゅうちやくするのは、何か理由があるのではないかと思ったのです。

果して、木像の中から金無垢きんむくの大変な仏像が現われました。大師入唐にゅうとうのとき、将来したのではあるまいかという——これは後の話——。

## 七

牛込見附の番所に来ると、ガラツ八は得々として迎えました。

「親分、首尾よく挙げましたよ」

「何？ 誰を挙げたんだ」

「山脇玄内親娘おやこですよ」

「馬鹿野郎」

「あッ、あれは、親分」

平次の後から下っ引が追いついて来た曲者を見ると、さすがにガラツ八の顔色が変わりました。

「山脇玄内はこの男だよ」

「すると、あれは？」

「成瀬なるせ九十郎さ」

「――」

ガラツ八の眼が飛出さないのが本当に不思議な位でした。

番所の中にはガラツ八と五六人の下っ引に縛られた成瀬九十

郎が、娘のお加奈かなといっしよに、割り切れない顔で運命を待っております。

「お、平次」

「いや、次平ですよ、——五郎八が飛んだ粗相そそうをしたそうで、まア、勘弁して下さい」

平次はそう言いながら、お加奈と九十郎の縄を解いてやります。その時、平次の後ろから引立てられて来た曲者が、灯の中へ顔を出しました。

「お、兄上、到頭」

成瀬九十郎の口から出た言葉は、何も彼かも説明してしまったの

です。

「九十郎、俺を訴人そにんしたのは、お前だな」

山脇玄内の顔色がサツと変ると、激しい言葉が洩れました。

「いや違う、私ではない」

成瀬九十郎の、これが精いっぱいはつきりの弁解です。

その間に、ポロポロと涙をこぼして居るのは、娘の加奈だけでした。その深刻な悲嘆の理由わけは、多分父も伯父も知らなかつたでしょうが、平次だけは判然知はつきりつておりました。山脇玄内という兇

賊を自分の伯父と知る由もないお加奈は、父に來た手紙を見て、

——今夜海真寺を襲い、本尊を盗み出す——企くわだてのあることを覺さとつ



て、父を恐ろしい疑いから救うために、平次に密告の手紙を出したのです。

山脇玄内と成瀬九十郎は、それつきり引き離されました。淋しく家路をたどる親娘おやこの後ろから、平次は追いつき加減に、

「成瀬先生、また参りますよ。忍術の稽古に」

こう声を掛けると、

「いや、もう忍術指南は止しじや」

成瀬九十郎は振り返りもせずに応こたえて、月のない神楽坂を登っ

て行くのです。

×

×

「親分、あつしには少しも解らねえ、あれは一体どうしたことな  
んで？」

縄付を引渡した帰り、ガラツ八は平次に絵解きをせがみました。  
「俺も解らなかつたよ、——だが、成瀬九十郎という人間のひとがら  
と、娘の人柄にどうも悪人らしくないところがあると思つたんだ。  
最初は成瀬という人を、山脇玄内と思ひ込んだのはお前と同じこ  
とさ」

「へエ——」

「岡っ引は証拠を揃そろえることも大事だが、人間を見ることも大事  
だよ。——あの成瀬という人は、兄の山脇玄内のやり口をよく

知って居たんだ。同じ霞流忍術かすみりゆうの達人で、兄弟だもの、それは無理のないことさ。尾州の二千両、天城屋あまぎやの千両、皆兄おかに罪を犯させたくないから、俺に教えて捜し出させたんだ」

「へエ——、それほど賢い人間かしこが、何だつて忍術指南の看板などを出して、上役人の目に止まるような事をしたんでしょう」

ガラツ八の疑問はなかなか突っ込みます。

「それが解らないばかりに苦勞したよ、——笹野の旦那のお言葉添ぞえで、甲賀町の忍術者のところへ行つて聴くと、霞流の忍術というのは大變珍しいもので、天下にこの流儀を伝える者は山脇大膳という人の門人二三人しか無いと言うことが解つたんだ」

「――」

「成瀬なるせという人が、霞流忍術指南という看板かんばんを出したのは、江戸

中の噂にして、仲間の者を呼ぶためだと見当をつけたが、後で考

えると、これは兄の山脇玄内を呼ぶための苦しい計略けいりやくだったんだ、

――兄の山脇玄内が、泥棒になって江戸中を荒らしている。それ

は捨て置けないから、何とかして兄を呼び寄せて意見をし、本心に還かえらせるつもりのところへ、俺とお前が入門したんだ」

「へエ――」

「向うは平次に八五郎と知って入門させた。それからはお前の知っての通りさ、――多分、左内坂を引払う頃、願いが叶かなって兄

に廻り逢ったことだろうが、玄内は弟の意見など聴き入れなかつた」

「なるほどね」

「娘のお加奈が——今晚は海真寺の本尊を盗むつもり、放埒な住職をこらしめるためだ——とか何とか書いた玄内の手紙を見て、それが真の伯父とも知らずに俺に教えたのだろう」

「お加奈は泣いていましたぜ、可哀想に」

「俺は唯泣かせた丈けだが、お前は縛つたじゃないか。いずれにしても夕顔の花とは縁がないよ、諦めるが宜い」

「へッ、有難い仕合せさ」

ガラツ八はペロリと舌を出しました。調子は道化どうけしておりますが、  
顔に漂う一抹まっの哀愁は覆おおうべくもありません。

(編注)

作品中には、身体障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

月五日発行

底本―「錢形平次捕物全集」第五卷 河出書房 昭和三十一年七

月十五日初版

編集・発行 錢形俱樂部





# 錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>